

写真1  
2016年に銀座の美術家連盟画廊で開催された「2015 自由美術展平和賞受賞記念 竹永亜矢作品展 - 平和への道 - The Emperor's visit -」の様子



**日** 本に奈良時代（天平）から伝わる伝統技法脱活乾の第一人者として活躍する竹永亜矢。熊本県のほぼ中央に位置し、古くは城下町として栄えた自然豊かな八代市で生まれ育ち、持ち前の感性を伸ばしていった。幼少期から描くことや粘土で表現する

ことが好きだった彼女に対し、両親も協力は惜しまず、いつしか美術の道に進むことを意識したそつだ。そんな竹永は、思春期に観た、美術院国宝修理所の技師たちが古い仏像の修理をおこなう姿に感銘を受ける。日本の風土、文化の中で育まれた古典芸術を継承する技師たちの姿が現在の竹永亜矢につながっているのだ。大学では彫刻を専攻し、塑造を中心に西洋彫刻や現代彫刻を学ぶ。彫刻の基礎を習得し、美術院国宝修理所で技師として修理経験を積んだ彫刻家・埴和道から脱活乾漆の伝統技法を学んだ。この技法は、1200年ほど前、天平の約80年間に多用された。塑造による立体原型に、漆と布を交互に重ね貼りして作る。漆が乾くまでの時間が必要なこと

と、高級材料を必要とすることから、奈良時代を中心とした一時期しか制作されず、現代に残る作品も少ない。脱活乾漆と古典彫刻の研究から立体表現を追究する中で、日本や海外の石彫や木彫に見られる、それぞれの素材の持つ造形性に着目した竹永。塑造で原型を作る脱活乾漆だが、変幻自在の粘土故にそれが弱点となることもある。しかし、彼女は制限を与えた造形から、静かな佇まいの中に緊張感のある空間を作り出し、漆の魅力を引き出す表現を発表した。それが、「立つ」シリーズである。エジプト彫刻を思わせる、素材の精霊が宿るかのような作品だ。2009（平成21）年からは「平和への道」をテーマに、綿密な計画のもと毎年一

体ずつ作り続け、2015（平成27）年自由美術展（国立新美術館）では平和賞を受賞、これまでに制作した同シリーズ作品を構成した個展を翌年に開く（写真1）。彼女の集大成とも言える展覧会であった。2016（平成28）年以降は、「立つ」シリーズでも空間をより意識した作品を展開している（写真2）。テーマである「平和への道」をよ



2018 space・立つ - The Emperor's visit -  
70.0 x 85.0 x 64.0 cm / 木芯乾漆：漆、麻布、絵 / 2018  
2018年 第82回自由美術展出品

写真2



2016・立つ  
175.0 x 38.0 x 35.0 cm  
脱活乾漆：漆、金箔、麻布  
2016  
2016年 第80回自由美術展  
出品

彫刻家

試行錯誤を繰り返し、  
今日も伝統技法に挑む  
竹永 亜矢

A y a T a k e n a g a